

（別紙2）

審査の結果の要旨

氏名 荒木達雄

本論文は、現在見られる形の『水滸伝』が最初に姿をあらわしたと考えられる百回本が、いかにして成立したか、またどのような意図にもとづいて編纂作業が行われたかについて考察したものである。

第一章では、『水滸伝』に関わる多くの資料を紹介し、先行研究を整理した上で、『水滸伝』の成立を、「全百回、百八人の登場人物、梁山泊集団誕生、成長、崩壊」という構成を、その最終編纂者が定め、創作をも含む編纂作業を行った結果と定義し、意欲的な問題提起を行っている。

第二章では、最終編纂者による『水滸伝』編纂の核となった宋江の物語について検討した。『水滸伝』以前の資料に見える宋江は、一般的な無頼の英雄と同様、凶暴で礼儀をわきまえぬ人物であった。ところが『水滸伝』の宋江は地方の吏で、腕力武力はなく、旧来の知識人的倫理観を守ろうとする小市民である。こうした宋江像の原型として、成化説唱詞話に見える農村出身の文人が出世していく非武人の発跡物語である包公の故事を指摘した点は重要である。

第三章では、『水滸伝』において宋江と対になるように形象されたと思われる李逵の分析を行なった。李逵は、『水滸伝』において、より目立った活躍をするようになった人物であるが、李逵は宋江が失った無頼の英雄の特徴の多くを引き受けており、李逵と宋江の二人が、『水滸伝』最終編纂の過程で表裏一体の関係になるように形成されたことを明らかにした。

第四章では医書および雑劇に取材したと認められるエピソードについて検討した。最終編纂期に設けられた『水滸伝』第六十五回では、その故事の前後に、物語の展開とは関係のない薬事、医療描写が見られる。この描写を、当時の医書や医師に関する記述と照らし合わせることで、編纂者がこれら書籍を参照できる環境にあり、また編纂者が、知識人の鑑賞に堪えるべく編纂を行っていたことを明らかにした。

第五章では、多種多様なエピソードを有する人物たちがいかにしてひとところに集められ、ひとつの大きな物語のもとにまとめられたのかを、「仲間集め」の視点から考察した。ここでも、宋江と李逵の存在の重要性が証明されている。

梁山泊百八人の人物を結びつける力として働いているのが「義」であり、第六章では最終編纂者がこの「義」をいかにして利用しているかを、『水滸伝』および同時代の作品に見える「義」を広く観察することにより考察した。「ひとたび成立した人間関係秩序は決して壊さない」という物語原理としての「義」は、多種多様な来歴や思想をもつ豪傑たちを、その多様性を維持させたまま、同時代の読者に不自然の感を抱かせることなく最後まで物語を進め、かつ結末に向かわせることができる恰好の倫理観であったと指摘し、知識人化した宋江が生まれた一つの背景を明らかにした。

審査では「最終編纂者」の定義にやや不明確な点があることなどが指摘されたが、全体の論旨を損なうものではなく、多くの資料にあたり、『水滸伝』を読み込むことによって、作品成立の過程と背景を追った本論文は、博士（文学）に値するものとする。